

■分科会『資質の高い教員養成推進プログラム』



○司会：それでは、お待たせいたしました。定刻となりましたので『資質の高い教員養成推進プログラム』の分科会を始めたいと思います。本日の構成は、まず初めに平成 17 年度に選定されました取組みを、3 大学から取組みの成果や今後の課題について発表をしていただきます。引き続きまして、事例報告をいただいた 3 大学の先生方と合わせて、教員養成 G P の選定委員会の委員長をお願いしております平出先生をパネラーとしてパネル・ディスカッションを予定しております。時間が限られておりますけれども、ご協力をいただければと思います。

また既にご案内していると思っておりますけれども、今年度選定いたしました取組み 24 件については、ポスターセッションという形でこのフロアで紹介しておりますので、まだご覧いただけていない方はご覧いただきたいと思っております。

まず初めに、教員養成 G P 選定委員会の委員長をお願いしております、平出彦仁先生をご紹介したいと思います。本来であればご挨拶いただきたいところですが、後ほどパネル・ディスカッションの際にコメント等をいただきたいと思います。

それでは早速事例紹介をさせていただきたいと思います。今回、3 大学の事例紹介をさせていただきますけれども、まず各大学 15 分程度ということで紹介させていただきます。1 番目に山口大学、それから 2 番目に佛教大学、3 番目に上越教育大学という順序で 15 分程度予定をしております。なおその概要につきましては、オレンジ色の冊子に山口大学は 50 ページから、佛教大学は 57 ページから、上越教育大学は 54 ページ

から概要等を載せておりますのでご参考にしていただければと思います。

それでは初めに山口大学の岡村先生からご説明をいただきます。よろしくお願いいたします。

○岡村：失礼いたします。山口大学の岡村でございます。どうかよろしくお願いいたします。それでは、山口大学が教員養成 G P として取り組んでおります『「ちゃぶ台」方式による協働型教職研修計画』について報告をさせていただきます。

ではまず「ちゃぶ台」が目指すものですが、本プロジェクトでは学生の自発的な実践意欲、自ら進んで教員として必要な何かを身に着けたいという意欲を尊重し、これを支援するための 2 つの場を設定します。1 つ目は、地域協働型研修の場として、皆さまご存じのフレンドシップやチューター事業等が該当いたします。これらに関して安定的な運営と拡充を図りたいと思っています。

2 つ目は省察と個別的支援の場です。例えば学生がチューターなどで地域や学校で活動いたします。そこで彼らはさまざまな場面や課題に遭遇し、悩みや疑問を抱えます。我々送り出す側の大学は、この学生の実態や悩みを十分に把握し、適切に対処してきたと言えるでしょうか。適切なアドバイス、カウンセリング、十分な省察の機会が与えられなければ実践は単なる経験にとどまってしまう、そんな可能性があります。さらに言えばこうした経験、これは誰もが遭遇する可能性があります。ただ、その共有化を図る努力も十分であるとは言いがたいと思っています。我々が目指した「ちゃぶ台」はこうした反省に立脚し、学生の自発的な実践、これを総合的に支援する教育システムを整備します。そしてこれにより教育養成教育そのものの活性化、充実化を図ろうとするものです。

次に「ちゃぶ台」では、定型化されにくい能力の醸成を目指します。課題を発見し解決する能力、コミュニケーション能力などはこれからの教員にとっていっそう強く求められるものです。しかしこれらの能力は、場面に応じて適切に発揮される臨機応変さ、あるいは自らが率先し局面を打開しようとする姿勢が必要で、定型化が困難です。「ちゃぶ台」方式では適切な支援や省察の機会を与えることにより、講義等で学んだ知識、そして地域協働型研修等で得た実践を融合し、真に生きて働く知恵に高めていく。これを目指しております。つまり「ちゃぶ台」が究極的に目指すものとしては教

員に不可欠な資質能力、それはいろいろあるけれども定型化が難しい、すなわちマニュアルを超えたところにある能力を獲得させよう。そのために必要な実践の場を用意し、支援体制を整えようということになります。

では実際に設置しました「ちゃぶ台ルーム」を紹介します。ここで余談ですが、皆さんはこの文字は誰のであるのか、ということをよくお聞きになるのですが、看板の板のほうは私が作りました、こちらのほうを全国で今初めて披露できたことを喜んでおります。

ではルームの概要としては、大きく三つのパートで構成されていて、それぞれについて説明いたします。まず赤枠で囲んだ部分です。最も中心的な役割を果たします。「ちゃぶ庵」と呼んでおります。地域協働型研修などで悩みを抱えた学生がその内容や思いを開陳し、大学教員あるいは現職の学校教員らがそのアドバイス、あるいはケアを行う場です。もちろん省察も行われますし、その他の研修会あるいは勉強会などにも多目的に利用することができるようになっています。

実際の部屋の中の様子です。丸い「ちゃぶ台」は互いの年齢や上下関係、あるいは立場を取り払うための仕掛けです。ここに座ると不思議とゆったりした温かい雰囲気で見聞交換をすることが可能になっています。つまりこの「ちゃぶ台」ルームはかつて我が国で至るところで見られた居間の風景、「ちゃぶ台」を囲んで家族や仲間が三々五々集まり会話し活力を得て、そしてまたそれぞれ自分の目的とするところへ出て行く。そんな気さくでかつ曖昧で豊かな場、これを現代的あるいは教育的に再現したものと言えます。またこれは山口大学が目指す「発見し、はぐくみ、かたちにする」教育の象徴化であり、郷土の教育者、吉田松陰の松下村塾に倣おうとする試みでもあります。

では、多目的ルームの説明をいたします。ここは打ち合わせや教材作成、自主学習等に使用される頻度の高いパートです。昼休みに学生有志が集まり、模擬授業などをする風景も見られるようになってまいりました。今ご覧いただいておりますのは、模擬授業後学生が書き終えていったものです。道徳の副読本が欲しいですとか、いろいろ我々に対しての注文を投げかけていってくれています。書き方そのものというのは別にして、意識が相当高まってきているということがこれからも理解していただけるのではないかと考えています。こういう気さくな雰囲気というのが「ちゃぶ台」

のメリットです。

次に「e-ちゃぶ」、青い枠で囲んだところ。このパートはデータベース・サーバ、ウェブ・サーバが設置されていることから明らかなように、実践事例やアドバイス事例の蓄積、各種教育資料のライブラリー化が主な機能です。実践で生じた失敗や成功などの体験、あるいは悩みや疑問とこれに対する助言事例、あるいはその他のもの、これらは当事者である学生個人に特別なものではなく、いずれ誰もが経験するであろう内容です。「e-ちゃぶ」ではこれら貴重な教育的資料を積極的に収集し、共有化を図ることを目的としております。また「e-ちゃぶ」では卒業生や遠隔地に所在する方などを対象にしまして、時間的・空間的制約を越えた学びの場を提供することを目指しております。

これは現在稼働している「e-ちゃぶ」のトップページです。山口大学教育学部のホームページからも閲覧することができますので、ぜひ試していただけると考えます。

では、「ちゃぶ台」ルームを核とした連携の図を示します。始まったばかりのプロジェクトですけれども、互いの関係は非常に良好で少しずつ実績も積み重ねてあります。将来的には地域における教育実践のハブとして、現職学校教員の研修も視野に入れた運用を図りたいと考えています。次に運営組織になります。山口大学及び教育学部では現在、県ならびに教育委員会と協定を結び、連携のための推進協議会を設置しています。この下にプロジェクト連絡協議会を置き、さらに実際の運営にあたる「ちゃぶ台ルーム」企画運営委員会を学部内に設けています。現在はこれに学生運営委員会が加わりました。我々教員と協働しながら、この「ちゃぶ台」の運営を図っております。またこの学生運営委員会は、今後評価についても関わる予定にしております。

では地域協働型研修について説明いたします。これが現在実施しているものの一部です。特徴的なものについて、いくつか紹介いたします。まず2段目の放課後学習チューター、その中に平川小教師養成プロジェクトというものがあります。平川小学校と申しますのは、市内でも児童数千人強を擁します大規模な学校です。大規模校に伴うさまざまな悩みや問題を抱えています。もともと普通のチューターとしてこの事業はスタートしましたが、受け入れ学校として平川小学校な

どの大規模校が欲しい人材を学校としても育ててみたいという希望を受けまして、昨年度模様替えをしています。より意識の高い学生を選抜し鍛えるという目的から、参加する学生のオーディションを行う等新しい試みも行っています。

次に最下段の「ちゃぶ台林間学校」をご覧ください。これも本プロジェクトを機に野外活動施設、国立山口徳地少年自然の家のほうから声をかけていただきスタートしたものです。こちらは、活動の様子を示しています。学生が主体となって企画・運営・評価をするこの活動は、多様な発達段階にある児童たちとふれあい、子供たちの実態や発達の变化、子供同士の相互作用などを理解する格好の機会となっています。宿泊を伴う活動ですが、春、夏、秋——秋については今月末の実施を予定しており、今学生たちが精力的に取り組んでいます。

写真のように、これは学生よりも年齢の高い方が参加しているのが見えますが、保護者の方たちにも大学の「ちゃぶ台ルーム」に来ていただき意見交換、反省会等を協働して実施しています。

では、省察と個別的教育支援について述べます。まず教職導入プログラムですが、具体的には「教職概論」を入学直後の1年前期に必修科目として設置しています。養成教育全体の基盤として、現職の学校教員との交流を多く取り入れるなど、教職の意義や魅力を知らせ、教職への動機づけを図る目的です。また、講義や演習、教育実習、そして地域協働型研修を有機的に結びつけ、省察や志望の足がかりになる教職カルテの記入をスタートさせます。次に日常的サポートですが、先に紹介しました「ちゃぶ庵」が主要な役割を果たします。現在スタッフとして現職学校教員、あるいは校長経験者が在駐し、実践面での踏み込んだ指導を行っていただいております。我々大学教員にとりましても学校現場の理解、あるいはアドバイスの方法なども学ぶことも多いというのが実感です。

次に「ちゃぶメール」は、地域協働型研修に参加した学生と大学担当者との間で交わされるメールです。ポートフォリオや教職カルテをより扱いやすくする目的でこの5月以降施行しております。学生の素朴な疑問や悩みが率直に寄せられております。さらに環境を整えば、積極的に導入されても良いものだというふうに考えております。具体的なそのやり取りの内容につきましては本日皆さまのお手元にあると思っておりますが、

この白いペラペラの冊子ですが、こちらのほうに最近9月・10月分のやり取りを載せておりますので、参照していただけたらと思います。

では「ちゃぶ台研修会」について述べます。まず学生側主催についてですが、所属教室を越えて学生たちが意見交換する場というのはこれまで殆んどなかったように思います。互いに研鑽し、経験を共有し合える場が得られた意義というのは非常に大きいと思っております。例えば教育実習が終わった後、いろんな教室の学生が集まって、「実習武勇伝！ブ憂伝？」ということで、こうやったらうまくいった、あるいはこういので失敗したというようなことを開示しています。次に教員側主催につきましても、やや形式的な面があるので省略させていただき、共同主催のほうについて述べさせていただきます。代表的なものとしまして、「めざせ！ちょいスゴ先生」を挙げました。これは地域協働型研修等で学生が抱えた悩みや課題を出し合い、学生や教員を交えて皆で討議するというものです。事前に学生のほうから、例えば何々先生のアドバイスがほしいといったような要望が出されることも多く、意識の高い学習活動が行われております。学生に試されていると言っただけでは言い過ぎかもしれませんが、我々大学教員にとりましても学生によって鍛え直されている、そんなFD研修（ファカルティ・ディベロップメント：学部・学科全体で、その教育理念・目標や教育内容・方法についての研究・研修）としての側面もこれには認めることができます。

では、成果と今後の課題を整理します。まず学生の主体的取組みを総合的に支援するシステム整備に関しては、「ちゃぶ台」を軸とした2つの場の整備が進行中です。その中で得られた実践事例、すなわち失敗や成功、悩み、課題といった教育上の宝物の集積も進んでいます。ただし、その共有化については、「ちゃぶ台」方式に沿った運用が必要ではないかという意見が出されています。具体的に申し上げますと、たしかに経験あるいは実践事例の共有化というのは必要です。だがそこに「e-ちゃぶ」やデータベースに答えがあるのはおかしいのではないだろうか。「ちゃぶ台」の精神から言えば答えを見つけるのが本来の目的ではなくて、そこから答えを生み出すような、そんなことができるようなデータの開示の仕方・陳列の仕方が必要なのではないだろうかということが言われています。資料の有効利用を図るため、整理分析も含めまして、さらに

これについては研究を進めていくというふうに考えております。

次に、マニュアル化されない教員資質の獲得に関しましては、協働型研修やその後の省察、助言などによって効果が見られつつあります。ただし現状を俯瞰してみますと、「ちゃぶ台」を核として意欲的な学生が集まって来ます。当然互いに刺激し合い、いっそう熱気を帯びてきています。実はこれが成果の一方、新たに参加したいという学生にとりましては「ちゃぶ台」は熱いと映るようでして、敷居が高くなるという現象が生じています。こうした「ちゃぶ台」予備軍ともいべき学生をどう引き込むか。そしてその裾野をどこまで広げられるか。今後、我々の工夫が求められていると思っています。

それから活動を安定的・継続的に実施するための課題ですが、まずこの活動は地域の支援や支持がなくては継続ができません。地域における教育的ニーズを的確に把握すること、そしてアフターケアとして、教員採用後も継続したサポートができる体制を整えておくことが必要だと考えています。いっそう充実を図らなければなりません。また教育委員会などと協力した全体的かつ実態に即した基盤整備も求められます。学校現場における学生の身分や、大学と学校で異なる時間割、あるいは保険や移動に関わる経費等整備すべき問題は少なくありません。

以上、最後になりましたが、本GPの採択を受けまして山口大学が構想する教員養成につきましてその一歩を踏み出せたこと、そしてまたこのような報告の機会をいただきましたこと、謹んで感謝を申し上げます。どうもご清聴ありがとうございました。

○司会：ありがとうございます。山口大学の岡村先生からの報告でした。

続きまして佛教大学、達富（たつとみ）先生からご説明をいただきたいと思います。佛教大学は『公立学校を基点とする小・大連携プログラム』ということでご説明をいただきます。それでは、よろしく申し上げます。

○達富：失礼いたします。京都から参りました、佛教大学の達富です。よろしく願いいたします。

私がこれから報告させていただきます内容の一番の特徴は、本プログラムが公立学校での展開を主としているということです。本学は私立の大学です。附属小学校もございません。しかし、本プログラムによって

公立学校におけるさまざまな学校現場のさまざまな子ども、さまざまな教室での問題の中から生きた問題意識を得ることができると確信しております。卒業生の多くは公立学校で教職に就くことになるでしょう。その公立学校で学生の頃から子どもと、そして現場の教員と触れることには、大きな意義と大きな価値があることを確信しています。

本学は平成16年に京都市教育委員会と包括協定を結びました。それまでは個人個人の教員が展開していた小学校との取組みを、組織的な取組みとして発展させることができるようになりました。この協定により、公立学校を基点とする小・大連携プロジェクトとして発展させ、個々の取組みを体系的な理論と実践の融合による教員養成システムとして実現することができました。本プロジェクトの大きな特徴は三つです。一つは、学校現場での教育課題からスタートする。次に、学校現場から得た気づきを大学教員と共に理論的に深める。最後に、深めたものを学生、大学教員、小学校教員、三位一体で作り上げる。この三つのことが本プロジェクトの特徴といえます。

スライドにあります、我々は理論知と実践知の融合を考えています。しかもそれを大学の一回生から四回生、さらに、大学院まで、複数年次に渡るスパイラルな構造の中で展開していこうと考えています。スライドの右にあります、先ほども申しましたスタートは学校現場の生（なま）の気づきです。それを理論として深め、また教室に戻し、また理論として深め、こういったことを順々に発展させていくことを考えています。つまり、理論知と実践知の融合です。

スライドには大きな丸い図がありますが、その中ほどに瞳の絵があります。これは、私たちは常に子どもを見るというカリキュラムを考えています。この図は理論知として佛教大学の理論を深め、そして京都市立の小学校の実践的な魅力を京都市教育委員会との包括協定により、より強く結びつけているという構造図です。なお、この考えを実際に展開していくために我々は3つのプログラムを持っています。1つが学校実践プログラム、1つがリレー講義プログラム、そして現職教員プログラムです。つまり個々をばらばらに考えるのではなく、組織的、系統的な取組みを進めていると言えます。

では、それぞれのプログラムについて説明します。まずは学校実践プログラムです。この表はその一部で

す。平成16年度は9つの学校園と連携を組み、学校実践を図りました。本年度は26校園です。教科教育に関しては14、幼児教育1、人権特別支援教育6、集団活動的な取組みが5、以上のように26の学校園と連携を結んでおります。この数はこれからますます発展的に増えていくのではないかと考えています。

学校実践プログラムはこれまでの学校ボランティアとは異なり、本学の学生で将来教職に就くことを強く志望する者に対して、京都市立学校園における教育活動を定期的かつ継続的な参加を可能にするプログラムです。これによって学生は教育実習前後の時期から学校現場に入り、実際の教育の現場で幼児、児童とふれあう機会を持つことができます。教育現場にとってはこのような定期的・継続的な連携の取組みによって、多忙な実務の協力者としての学生の力を活かすと共に、教育現場の活性化のきっかけとなることが期待されます。大学としても大学の人的、知的資源を提供すると共に、学生が在学期間中から学校教育現場の実態を学ぶことでよりよい教員養成に役立てることができると考えています。

続いて、リレー講義プログラムです。リレー講義プログラムは佛教大学と京都市教育委員会が相互の人的・知的資源の交流活用を図ると共に、大学や京都市立学校、あるいは幼稚園の教育活動の活性化に向けて柔軟かつ適切に対応し、相互の教育の充実・発展に資することを目的としています。このために、教職への導入科目や教育実践科目の一部を京都市教育委員会の指導主事の先生や、あるいは現職の教員と本学の教員とのリレー講義の形で実施しています。本年度は22科目についてリレー講義を開講しています。

最後に、現職教員研修プログラムです。本プログラムは京都市内全域の小中学校の教員に本学の授業科目を開講する研修プログラムです。本学は学校教員が参加可能なように、土曜日、日曜日や、あるいは長期休業期間中に集中講義を開講しています。専門的知識を学校教員に提供するだけでなく、学校現場の課題を大学院、学部の授業に反映することによって学生・教員が共に学び合うことを可能にしています。机上の理論だけでなく、理論をもとに、具体的に現在の学校教育現場の実践にどのように取り組んでいくことが可能なのか、そのような点にまで言及することが可能です。本年度は通学課程、通信課程、学部、大学院、合わせて26の科目について現職教員研修プログラムとして

開講しています。

また3つのプログラムを通した内容としてポータルサイトの開設、運用をしています。画面はそのトップのページの紹介に過ぎませんが、現職教員、大学教員、学生がそれぞれ展開してきた種々のプログラムをポータルサイトにおいて共有することが可能です。例えば、算数や図画工作におけるデジタルコンテンツなども、この中の「教材箱」に保管し管理・運用しています。

さて、本プロジェクトの成果と課題です。これは私が実践しました国語教育のプログラムの実践後の学生の意識調査です。この中で最も多い数値を示しているのは、「自分が教師になるための課題が見つかった。そして国語の知識が足りないと感じた」という点です。教師になりたくなったという数字が非常に少ないのは、参加している学生がもともと高い教員養成、教職への志願があるからであると考えられます。つまり本プログラムに参加したことによって、単に教職にあこがれているというだけではなく、教職に対する具体的な課題を明確にすることができたと考えられます。今後、我々は、3つのプログラムのさらなる充実、かつポータルサイトの充実、そして活用を考えていきたいと思っています。

我々の取組みについて、多くの方々に評価を仰いできました。京都市教育委員会の教育長である門川大作先生をはじめ京都府知事、あるいは学校現場の校長先生や教員の先生、さらには大学の先生、そしてスポーツコメンテーター、さまざまな角度から多様な評価をいただけてきました。今後はこれらの評価に立脚し、さらに客観的な評価指針を持ち評価していくシステムを作っていきたいと考えています。とにかく学生にとって、そして教育現場にとって大きな成果をもたらすことができる本取組みを今後も続けていきたいと考えております。

○司会：ありがとうございました。佛教大学の達富先生からの報告でした。

続きまして、上越教育大学の藤田先生にご説明をお願いしたいと思います。上越教育大学は『マルチコラボレーションによる実践力の形成』ということでご説明いただきます。よろしく申し上げます。

○藤田：よろしくお願ひいたします。上越教育大学の藤田と申します。

私たちの実践は『マルチコラボレーションによる実践力の形成』という、題名の下で行ってまいりました。

このプログラムには大きく分けると2つの焦点があります。1つは、ただいまご紹介いただいた2つの大学の例とは異なりまして、私どもは大学院における質の高い教師教育というのをどうしたらよいか、その辺を一つの焦点にしています。というのは私どもの大学は大学院の定員が1学年300人おり、通常の大学とだいぶ違っています。しかもその300人のうち100名は現職の教員が来ています。2年間フルタイムで来ておりますのでその特徴を生かそうという、そういう試みです。ですからその現職の教員の大学院生、彼らの専門性を高度化させていこうというのが1つ課題となっています。そしてもう1つは、もちろん私どもの大学にも教職経験のない大学院生、ここでは学卒院生と呼ばせていただきますが、その院生の質的な向上、教師としての思考・行動様式というものを身に着けさせよう。こういうことが私どもの1つ目の焦点です。

そしてもう1つは、学校現場への取組みへの支援というところ。というのは、今まで教員養成と言うとどうしても学校現場に丸投げするとか、学校現場の負担を増やすとか、そういったことになりがちだったように思います。そうではなくて、今回の取組みで、実は学校現場にとってもメリットがある、ということにできないだろうか。そのようなことを考えて、このプログラムの焦点の2番目にしています。

では、どういうふうはこの取組みへの支援をしたらいいのか、と考えたところ、やはり学校現場では今さまざまな課題を抱えており、それを何とか一緒にやって取り組んでほしいというニーズがあります。それに応えていくことを通して、この大学院における質の高い教師教育も行えないだろうか。このような2つの目的を同時に追求するプログラムができないだろうかということで、今回の取組みを考えています。

それではプログラムの内容の説明に移ります。これは大きく分けると、第一段階のロケットと第二段階のロケットというふうに二段階方式になっております。そして最初に第一段階ですが、学校現場の取組みの支援といったことで最初に主に昨年度行いました。その中心になっているのが、学校現場の教育課題です。それぞれの学校現場にはそれぞれの学校特有の教育課題がありまして、それに対して通常の場合はその学校の先生方が何とかそれについて頑張っただけで解決しようとなさっているわけです。そこに私どもとしては、大学教員がそこに行ってその先生方の手伝いをしよう

と。そして大学教員が行くだけではなくて、そこに現職の院生と学卒の院生が一緒になってチームを組んでいる。そしてこの先生方と協働してこの課題に取り組もうじゃないかと。そしてその課題を解決する中で教員養成も行っていこうと、こう考えたわけでございます。そしてなぜこれがマルチコラボレーションかと申しますと、1つはこういうチーム同士の協働というものがありません。コラボレーションというのは質の違った人同士が協力することで新たな別のものを作り出すという、そういう意味合いがありますが、違った立場の人々が協働するというところでここに新しい何かを生み出そうとしている。これが1つの協働です。

そしてもう1つは、学校の先生同士の協働、そして現職院生と学卒院生の協働。そして私ども大学教員もいろんな専門がありますが、その大学教員も協働することでこの学校に多角的な知見をもたらそうじゃないかと。そういうことで「マルチコラボレーション」というふうに銘打ってあるわけです。そして第二段階のロケットとしましては、先ほど行いました学校の課題への取組み。これをやりつばなしでは非常にもったいない。ではこのやってきた取組みを大学院生チームの学びの進化につなげられないだろうか。ここが第二段階のロケットということになります。

学校現場における支援の経験というのをそのままにしておかないで、自分たちでそれを振り返り、そしてそれを外に発信することによって自分たちの経験を再構成してもらう。それによって大学院生たちの学びが深まっていくという、そういったことをねらっております。具体的にはどういうことを行うかといいますと、大学でこのチームに授業を行ってもらいます。他の大学院生、学部生に対して自分たちの経験を発表してもらい、そういうことをします。そしてその授業をしただけではなくて、それをホームページのコンテンツにまとめて、それで全国に発信していこうじゃないかと。このようなことを第二段階として現在今、行っております。自らの経験を伝達することによる学びというものをしていこうということです。もちろんここで去年行った各学校現場への取組み支援というのが終わるのかというところではなくて、それぞれフォローアップという形で今でも継続してその学校と一緒に取組みようとしています。

さて、ではこの学校の取組み支援ですが、どのような手続きでそこに迫っていったのか、ということ

単にお話したいと思います。それぞれの学校のニーズというものが一体どういうものがあるのかということ把握する必要があります。私どもの大学がある上越地域の全小中学校に対して、そちらの学校ではどのようなことが課題で、大学と一緒にやって取り組めるものは一体どのようなものがあるのかアンケートでお尋ねしました。そしてそのアンケートが上がってきた段階で大学教員の中で、この課題に取り組んで学校現場の支援をしてくださる先生方はいませんか、ということ呼びかけをしました。そしてその先生方にはアンケート結果を参照して、その先生方に大学院生を集めてもらい学校支援チームを作りました。そしてチーム全体で集ってもらい全体説明会を行いました。その中で、そういうことであればぜひ行きたい、あるいはそういうことであれば今回はちょっと準備不足なので次年度にしたいと、いろんな先生方がいらっしやまして、最終的には学校支援チーム全12チームが学校現場に派遣されていきました。チーム毎、全てそれぞれのやり方で学校にアプローチして、そしてその学校と取り組みをしています。

では実際にこの12チームが、どういう支援の取り組みをやったのか、いくつか事例をご紹介しますと思います。まず教科指導関係の事例です。1つは特別支援ですね。最近いろいろところで問題になって、学校では支援が欲しいという切羽詰った声をたくさん聞くのですが、その特別支援に配慮した国語科学習。国語の授業の中で、そのようなお子さんの支援をどういうふうにしていくかという取り組み。あるいは、総合的学習をどういうふうにしていくか。あるいは国際理解に焦点を当てた小学校での英語をどうしていくか。あるいは学校全体の教科指導のやり方を改善していくのは、どのようなやり方がいいのか。その観点で取り組んだチームがあります。

生徒指導関係としましては、例えば中学校の道德教育。例えばいじめですとか最近問題になっておりますけれども、そういったところで道德教育プログラムをどんなふうにしていったらいいか。あるいは学校のリーダーというものをどうやって育成していったらいいか。そういったそれぞれの学校から上がってきた事例にこちらのチームが行って取組むと、そういった形でやってまいりました。

さて、それではこの中の一つ、私に関わりました事例についてさらにちょっと詳しくご説明申し上げたい

と思います。私に関わりましたのは中学校のリーダー育成プロジェクトというところです。現職教員の大学院生が3人、学部からすぐ来た学部卒の大学院生が3人、そして私ども大学教員として、私が教育社会学の専門ですが、その他に学級経営の専門の先生、道德教育の専門の先生であわせて3人と、3・3・3の計9人でチームを組み、中学校に参りました。ここでは「K中プロジェクト」と呼ばさせていただきます。ここではリーダー育成という課題、学年、学級単位のリーダー、それと同時に学校単位の生徒会のリーダーですね、そのリーダーをどう育成していったらいいかということアクション・リサーチ、その場でリサーチをしながらまた働きかけもしながら、課題解決に向かっていくというやり方で実践していきました。ですからこれはどこかから理論を持ってきて楽にやればいいんだということではなく、その学校の実態に合わせて考えていくこと、そういうやり方をしたわけです。

ではこのK中プロジェクト、昨年度は次のような形で進みました。まずこのGP自体が年度途中からということもありましたので、その学校に接触するのも10月からになってしまいました。けれどもこの10月から11月という長い時間をかけて、最初に大学側の思いと中学校側の思いのすりあわせを行いました。といいますのも、やっぱり学校現場の先生方はお分かりだと思いますけれども、大学がやってくるとなるとまた余計な負担を増やすのかという、そういう思いが学校現場のほうにはたくさんあって、それまで嫌な思いをたくさんしてきた先生がいらっしやる。そうではなくて、これは双方のメリットになるといったところを丁寧に話していく。それで少々時間がかかりました。

その後、子供の状況を先生方と共有しようということで、一方的に私どもから何かを言うというのではなくてちゃんと子供の様子を知りたいということで、私たちはフィールドワークとして朝から帰りの会まで一日中学校の中に入って子供の様子を見学する、そういったことをしました。そしてもう一つは担任の先生方ともいろいろ話し合いをして、子供の状況の共有をしました。そしてまだまだ分からないことがあるということで全ての子供に対してアンケート調査をしました。このアンケート調査も作成段階で学校側ともいろいろ話をしました。そしてこのアンケート調査、あるいはフィールドワークの結果、こういうことが言えるのではないのか、こんな取り組みをしたらどうでしょう

かといったことを提案させていただいたのが2月になった時であります。この2月以降、先生方が取組みを実践しまして、そしてその後もう1回同じようなアンケートをして、その内容がどうだったかということをもう一度きちんと評価する。そのようなことを行いました。

もちろんその先生方が実践するのも実践を勝手にやってくださいということではなくて、細部にわたって私たちがいろいろとサポートし、例えば1つの学級では1年の締めくくりに自分たちの学級を振り返ったビデオを作りたい。ある班は先生方への感謝をするビデオ、他の学級では友達へのビデオ、他のところでは学校行事のビデオを作りたい。そのようなビデオを作るのを全てサポートするというようなことも行いましたし、また2年生では3年に行く修学旅行に向けた取組みといったところで、リーダー育成をそこに重ね合わせた実践を行いました。

そしてどういった成果があったかと言いますと、アクション・リサーチのプロジェクトとしては学校現場の取組みがきちんと支援できたと。これは実際K中の先生方にも喜ばれ、来年もよろしく、ということを言われて、今年また行っている最中です。そして実際に実態に合わせてこういう提案をしてもらえるとというのはとてもありがたい、というお話をいただきました。そしてもう1つは、私たちが入っていくことによって、先生方は忙しいけれども、自分たちの実践を振り返るチャンスになった。隣のクラスでどういうふうに班や班長づくりをやっているのか、ということについて今まで交流する時間がなかったのに、これをきっかけに「そちらはそんなことをやっていたのですか」といったことで交流するきっかけになったと。それは非常に良かったというふうにおっしゃっていただきました。

さらに教師教育のプロジェクトとしてはどうだったかと言いますと、現職の院生にとっては今まで大学で理論を学んだけれども、実はそうではなくて、現場の中に理論がある。現場のいろんな仕組みが1年生と2年生で違ったりとか、いろんなものが調査する中で見えてきます。そういう現場に根ざした理論というものがある、それに対して働きかけをしていくことが大切だということが実感できたと言ってもらえました。そして大学と協働するということには実は有効性がある。今までアンケートを取ってくれと頼まれても何のためにあるのかよく分からなかったが、こういう有効性が

あるのだから今後も協力しますというようなことを言うていただきましたし、学卒院生と協働したことがとても刺激になったと。自分たちはもう当たり前だと思っていることが彼らにとっては当たり前じゃなくて、それを説明することで自分の理解もさらに深まったということを書いていました。

学卒院生にとっては、学校現場にこういった形で参加できたというのはすごく良かった。今まで教育実習という形だけだったのですね。そして学校現場での活動の経験、生徒とのふれあい、それがとても心に残ったとも言っていましたし、あとはどうしても教育実習と言うと授業をやることに一生懸命になるのですが、彼らは今回、授業以外の場面で入っていったということがすごく役に立ったと言っていました。そのためこれがさまざまな学校現場を知るきっかけになったと、考えられます。

今後どうやって展開していくのかということをお考えますと、このような取組をきちんと継続していくことが必要になってくると思います。この今回の教員養成GPがなくなってしまったらこの取組もなくなるというのではなく、これをきちんと継続していくことです。この継続というのは協働を通じた質の高い教師教育を続けていくこと。学校現場のニーズへの細かな対応を継続していくこと。そして学校現場と大学が協働する、きちんとそのシステムを作ること。このために今本学では今回行いましたことを教職大学院のカリキュラムとして入れていこう。そういう形で継続していこうと考えています。そのためにはさまざまな改善も必要です。ですから今回は協働してくださった学校現場から評価を受けて、今後の改善点などを今洗い出しをしている最中でございます。

以上です。ありがとうございました。

○司会：ありがとうございました。上越教育大学の藤田先生でした。

それでは本来であれば質問が多々あろうかと思えますけれども、時間も限りがございますので引き続きパネル・ディスカッションに移らせていただいて、最後に質問を受けつけたいと思います。パネル・ディスカッションということで平出先生はじめ、発表をさせていただいた先生方、ご登壇をお願いいたします。

それではこれからパネル・ディスカッションに移らせていただきますけれども、ここからの司会、コーディネーターは私どもの文部科学省専門教育課教員養成企

画室長の佐藤が行いますので、よろしく願いいたします。

○司会：失礼いたします。大変お時間もございませんので、できるだけ効率的に話を展開できればと思います。それでいてできるだけ皆さま方、せっかく日曜日ご参画いただきましたので、何か今日お帰りになる時に役に立ったと言っていたように司会、進行をさせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

それでは早速でございますが、今、3大学のほうから発表をいただきました。非常に濃密な内容で、成果と言えるかどうかというのはこれからいろいろ検証が必要なかもしれませんが、少なくとも取組みの視点、それから今実際にやっていたりしていること、ここは非常に斬新なものもありますし、あといろいろと我々に大所高所からの問題意識とご示唆をいただいているところがあるのかなと思ってお聞きかせいただきました。

ここからでございますが、今回このGPの事業自体の選定委員会委員長を務めていただいております平出先生にもご一緒にご参画いただきまして、できればこれまで、先ほどご発表いただいた内容をもう一步踏み込んで進化させていきながら、各大学にこれを持ち帰った時にどういう形で援用できるのか。またそれを共通財産として皆さんと一緒にどういうふうにご利用していくべきなのか、どう還元していくべきなのか。こういった視点でコミュニケーションを取っていければと思っております。

それではまず初めに大変恐縮ですが平出先生のほうから、この教員養成GP、平成17年から事業をさせていただいておりますが、この事業の趣旨ですとか必要性、それから選定にあたって各大学に期待を申し上げたこと、このような点を選定委員会委員長というお立場から少しお話をいただければありがたいと思います。よろしく願いします。

○平出：高いところから失礼いたします。選定委員を仰せつかっております平出です。実は旧教育職員養成審議会で平成9年に「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」の答申を出して以来、5つの答申に関係してきておりました。そういう関係上、私が選定委員の1人ということになった次第であります。

昨今いじめとか履修不足など、大変大きな問題が生じ、新聞等の報道が連日されているのですが、本日の

フォーラムと直接関係ありませんので脇に置くこととします。さて、以前から教員養成の課題は、社会の大きな変化に伴って、大変複雑多様化してきている学校教育の今日的な諸問題が以下に効果的に解決されるかということの絡みから検討され、そのためには何よりも高度な専門性と豊かな人間性、社会性を兼ね備えた質の高い教員が養成されねばならないということが帰結されます。ご存知かと思うのですが、本年7月11日に中央教育審議会から「今後の教員養成・免許制度の在り方について」という答申が出ました。その中で教職課程の質的水準の向上を取り上げ、仮称ですが「教職実践演習」という新しい必修科目を設定したり、教職履修の指導をしっかりと行うことなどが求められていますし、さらに「教職大学院制度」の創設や「教員免許の更新制」の導入など、いずれも教員の資質能力の向上ということに関わる取り組みが提言されています。

このような状況の中、平成17年度から「資質の高い教員養成推進プログラム」(平成17年度のプログラム名は「大学・大学院における教員養成推進プログラム」)がスタートしたのです。教職課程設置の大学・大学院は全国で900余あります。教員養成を主とする大学学部は大部分は国立大学法人ですが、それと同時に教員養成は開放性でありますから、私学でも相当数が教職課程を設けています。私は、中央教育審議会教員養成部会の課程認定委員会委員として、教職課程の認定大学等を毎年7、8校ほど実地視察し、教育課程等の内容を点検させてもらっていますが、大学によっては認定基準が下回っていたり、教員免許状の取得に必要な最小限の科目を置いてあるだけというところさえありました。今日ほど実践的指導能力ある質の高い教員が求められている時代はないにもかかわらず、大学学部はその姿勢が全く見られないのです。それとは反対に、極めて熱心に取り組み、特色ある養成に積極的な大学も相当数存在しています。このような状況の中にあつて、本事業は認定を受けている全ての国公私立大学・大学院を対象にして、ともかく現場サイドの課題に対応できる実践的な教育等を通して、高度な専門性と実践的な指導能力を持つ教員養成に取り組むプログラムを公募しようというものです。応募プログラムの中から優れているものを選定して国が財政援助し、その実施成果の内容を適宜公表してもらうことによって、素晴らしい教員養成の在り方等を関係者一同が共有するというのが、この事業「教員養成GP」の趣旨なの

であります。

○司会：ありがとうございました。それと、最後にできるだけ会場の皆さま方とせっかくこういう機会でございますから、お時間の範囲内ということですが、1人か2人、何かご質問、もしくはご意見がございませぬ方は最後のほうで挙手をしていただきたいと、最初に申し上げておきたいと思っております。

それでは、先生のほうから今ご紹介がありましたこのGPの趣旨でございますが、先ほど3大学の先生方に発表いただいて、これは若干私見に近いかもしれませんが、3大学ともやはり特にそれぞれのアプローチの仕方というのがあると思うのですが、理論と実践というのがやっぱり一つのキーワードになっているのかな、と強く思った次第です。お聞きしていて、例えば山口大学の先生のほうからの発表は、特に定型化されにくいその能力というものをどうやって客観的に把握していくか。それを身につけていくかというのは、大変難しい課題ですが、それも学校現場の実践とやはり大学の教育研究の現場との融合というものは当然必要になります。あと佛教大学のほうからも話がありました、これはまさにストレートに「理論知」というものを「実践知」というものにしていくのだと。だから頭だけで、もしくは大学の研究室だけでということではなくて、やはり身をもって体験していくということ、それを体で覚えていくということかもしれません。そういうご指摘もありました。

さらに上越教育大学のほうからは、マルチコラボレーションという話があった中で特に現職教員と、これは当然現場の経験がおありになる先生方、そしてまたまだ現場の経験のない大学院生、これをやはり同じフィールドで捉えていく。同じところで勉強していただき、またお互いに刺激をしあって学び取る。これも非常に理論と実践、それぞれのお立場、ウエートがありますけれども、そういうところが必要なのかなと。

特によくその教員養成の大学の現場、もしくは学校の現場という問題を考える時に、まず第一点言われるのは過度の経験主義という点があります。というのは、特に理論的な部分が欠如していて、やはり学校現場にこそ全ての問題解決の手段がある、とし、もちろんこれはある面正しいことをおっしゃっていて、こういうことは決して否定するものではないのですが、それが行き過ぎると全く体系化できないこと、要するに経験主義だけで全てを学んでいかなければいけない。これ

は大変新人教員にとっては苦痛であり、またそれをどういうふうに伝承していくか、伝えていくかというのは大変難しいところもあります。伝統文化を体で覚えて伝承していくというのは分野によってはありますが、この教職の分野で果たしてそれでいいのかという問題意識から、「過度の経験主義」という指摘があります。

ただその一方で、では理論のみを十分に学べば全て解決するのかということ、また別の視点、全く逆ですね。そうでもないだろうと。学校で学んだことをやはり現場と直結しないことをいくら学んだって意味はないし、現場とやはり共有した問題意識というものが必要であると。そこで今、先ほどの先生のお話にもございましたけれども、先ほどの7月の答申の中にもありますが、デマンドサイドの意識というものを持っていくのではないかと。これは既に教育現場の先生方は十分ご承知いただいていることだと思います。要するに学校現場のいろいろな問題意識というものをしっかり持ちながら、あとは採用側ですね、教育委員会が多くの場合当てはまると思いますが、当然これは学校現場と教育委員会、同じ立場だと思います。どういうふうにデマンドサイドの要求を大学の教育に生かしていくのか。また大学のほうからも、そのデマンドサイドにいろんな要求を出していく。そのすり合わせというか調整というのが当然そこで自ずとなされて、それがお互い必要な教員像、教師像、学ぶべきことというのが自ずと明らかになるのだろうと。そういうお話が今回の答申の柱だと思っています。

その解決の仕方について、いみじくもこの3大学の取組みというのが、それぞれの立場からお答えを出していただいているのかなということを、先ほどのお話の中から思った次第でございます。これは若干私見でございますから、そういったことを申し上げた上で、また山口大学、佛教大学、上越教育大学の順番で、それぞれ大学の位置付けも違います。先ほど若干お話にも出しましたけれども、山口大学は教員養成学部を持つ総合大学、それから佛教大学は総合大学として、上越教育大学は教員養成の単科大学と、それぞれまた各大学の事情、バックグラウンドというのは違うところもあります。こういった視点も踏まえながら、今回のこの取組みというものを、先ほどはどちらかということをやっていますということが中心だったと思いますが、それをちょっとまた一步深めまして、この教員養成のGPプログラムというものをどうい

形でうまく使っていただいたのか。もしくは逆にこういう点が使い勝手が悪かった、こういう点をこうしてほしい、そういったお話もあればぜひこの場でおっしゃっていただきたいと思いますし、また先ほど少しデマンドサイドというお話を申し上げましたが、その取組みの中でデマンドサイド、学校現場、教育委員会、その辺りとの連携のようなスタイルがもし取組みの中に既にあれば、そういったことも少しご紹介いただければと思います。

山口大学のほうから、大変短い時間でございますけれども2～3分程度でご紹介をいただければと思います。

○岡村:失礼いたします。山口大学といたしましては、先ほど申しましたけれども、皆さまのお手元にあると思うのですが「ちゃぶ台ルームのご案内」というのがあります。この一番裏に教育連携組織という形で今うちがどのような連携を図っているかということが主なものだけですけども紹介してございます。それからデマンドサイドということがありましたけれども、実はこの「ちゃぶ台ルームのご案内」があります一番表のこの丸い円の中に赤い学生が写っておりますが、その右隣は実は山口県の教育長です。それから下のこの丸の中ですが、この一番左端のちょっと切れかかっている白髪の男性がいますが、こちらは山口市教育委員会の教育長です。

何を申し上げたいかといいますと、今まで学生と県教育委員会、あるいは市教育委員会のトップと率直に話し合うような機会がなかなか持てなかったのです。我々は教育委員会側として「こういう先生が欲しい。」これに対し、「では私たちはどうすればいいのでしょうか。」といった学生が直接的なやり取りする場がなかったわけです。あるいはその間に大学の教員というものが介在することができなかったわけです。その場が1つ持てたというのは、こういう部屋を作れたということがGPをいただいた1番大きい成果かなというふうに思っています。

それから我々としては山口大学に地域における教育実践のハブ機能を持たせたい。その試みとしては、研修会を「ちゃぶ台ルーム」で行っていますが、そこに放課後あるいは休みの日を使って現場の先生方に来ていただいて、学生対象に話をさせていただいています。それも一般的には教室を使用し、講義の中で喋るとなるとなかなか本音の話はできませんが、「ちゃぶ台ルー

ム」というかなりさばけた、お茶も飲んでいい、お菓子もいい、アルコールはだめだけど、という部屋ですので、かなり踏み込んだ話、本音の話を聞くことができます。来ていただいた現職の先生の中からは、自分たちの学生の頃にこういう部屋が欲しかったと。それから、こういう部屋で君たちに話しているようなことが、実は学校現場ではできていないのだと。こういう話を君たちにしてあげられることを自分は幸せに思うというようなことをおっしゃっていただいています。ということは、「ちゃぶ台ルーム」というのが、既にこれから教員になる学生たちを巻き込みながら、地元のその教員養成あるいは学校教育全て含んだ上で機能し始めているというふうに考えております。

それから先ほど「ちゃぶ台林間学校」と述べましたけれども、教育は学校現場とそれから教職員、あるいは養成機関、あるいは教育委員会だけで成り立っているのではなくて、保護者というとても大きい存在があります。その保護者の方々の生の声を聞く、あるいは協働できる場というのもこの「ちゃぶ台」を介在して我々が実現できるようになったと思っております。その一つのものとしましては、チューターで学生たちが行っております山間部の30人程度しか子供がいない小さい学校があるのですが、このGPの予算を利用してバスを1台チャーターして、保護者、児童、それから学校の先生方、大学に来ていただきました。そして「ちゃぶ台ルーム」を紹介したり、大学の中をいろんな探検をしていただいたりして大学の紹介をさせていただくと共に意見交換を図りました。

こういった実際に保護者の方とふれあうような経験というのは、実はこれまで大学のカリキュラムの中に取り入れられることはありませんでした。こういうことに関しましてもGPの、我々としては先ほど報告できませんでしたけれども、大きな成果だというふうに思っております。もちろん、その中で学生たちが力をつけて評価されているのも事実です。そして先ほどの平川小学校の例で言いますと、今度11月30日だったと思うのですが、研究会があり、市内の小学校あるいは中学校の先生方がその平川小学校に行って研究授業をご覧になります。その中でチューターを使ったTT(チーム・ティーチング:複数の教員が指導計画の作成、授業の実施、教育評価などに協力してあたる)という形で研究授業を仕組んでいただいております。これは我々がお願いしたのではなくて、平川小学校さ

んのほうで非常に成果が上がっているということを確認していただいた証拠です。他の学校もこういうやり方があるんだよというふうに、学校側が率先して我々の活動を紹介していただいている。我々がやろうとしていることは定型化できない資質能力の醸成ということですので、非常に計りにくい部分もありますが、状況証拠というような形で報告させていただけたと思っております。

以上です。ありがとうございました。

○司会：ありがとうございました。それでは引き続き、佛教大学の達富先生のほうからお願いできますでしょうか。

○達富：とにかく佛教大学のこの2年間の取組みで言えることは、学生、そして小学校の現場の先生方や教育委員会、そして大学、三者にとっていずれの立場でも大きな益があったということだと思います。それは単に機会の充実というだけではなく、それぞれ三者三様の意識、思考の高まりだと思います。例えば学生については、教職に就きたいという学生が多くいます。中には現場のことをさほど知らないにも関わらず、自信を持っている学生もいます。自分は教職としてやっていけるという自信を持っている学生も少なくありません。しかしそういった学生も含めてですが、現場に入ることによって、その自信が本当に確かな自信になることもあれば、実は確かな不安であったということが分かるということもあります。いずれにしてもいいかげんな気持ちで教職員になるというのではなく、自分も持っているのは確かな自信なのか、確かな不安なのか、つまり自分自身の教職に対する資質みたいなものを自己評価できる機会であるとも言えます。

実際、現実に大学の教員、あるいは学生が現場に入っていくということについては、全ての場合について入りやすいという現状ではないと思いますが、小学校と連携するということに対して、教育委員会の方が非常にお骨折りをしてくださって、我々のプログラムを可能にしてくださっています。小学校も、私たちとの連携を喜んでくださっているという声を聞いておりますが、初めはやはり戸惑う部分もあったかもしれません。教育委員会の方々が非常に親身になってしてくださいました。そういった機会を我々ももちろん大切にしていきたいと考えています。本当に三者にとっていい機会になったのではないかと思います。

自分の友達がその学校にいるからという人間関係だ

けでこれまでは学校現場に入るというようなことがありましたが、本プログラムによって、京都市立の約200校全部の学校と連携できる、つまり組織として教員養成に関わることができたというのは、本GPの最大の魅力だったと思います。

○司会：ありがとうございました。それでは最後に、上越教育大学の藤田先生のほうからお願いできますでしょうか。

○藤田：よろしく申し上げます。このGPをきっかけにして、これまで各教員が個々人で学校現場とつながりながら、その学校の課題を支援するというのをやっていたのですけれども、このGPがきっかけになってそれが組織として動く。そういう個々人の動きを組織化できたというのが一つ良かったことだと思います。それによって例えばある学校はこの先生とは今までつながっていたけれど、他にもこういう先生がこういうことをやっている、というような形で大学の顔が見える、地元の学校に大学の顔が見えてくるという、そういったきっかけにさせていただいたところがすごく良かったように思います。

しかしながら、皆さんいいところばかりなんですが、私としましては、これは年度途中にお金が入ってくるというそういうところがありますので、実際に動けるのが本当に年も押し迫ってきたところからということになってしまう。それはやっぱり学校現場サイドにも、「ちょっと今年度は時間がなくて大変でしたね。最初はあわただしくて」というような話をよく言われたので、できれば前の年度中に採択を決めていただいて4月から開始というふうになってくださるともっといいかなと。と言いますのは、年度途中から「では、次の年もやればいいではないか」というふうに言われるのですが、学校現場は年度をまたぐと体制が変わってしまうのですね。先生も変わる校長先生も変わるシラスも変わるなんていうことがありますので、できれば年度当初から行けるようになるといいかなと。もちろんGP予算がつくつかないかに関わらず、年度の最初からやっていけばいいではないかという話ですが、それももちろんそうで私たちはたしかにやっているのですけれども、ただそれも勘案した上でその辺の使い勝手の良さというのでできてくるといいというのが要望です。

いずれにしても、そのようなことも含みながらも、特に私たちの大学は全国区の大学なので学校現場

からは拡充の希望が多く来ています。つまりどういうことかと言いますと、大学院に来るのは、地元の教員だけではなく全国から教員がやってきます。そのためさまざまな遠方の教育委員会からも「そういったことをやっているのだったら、上越地域だけではなくてうちともやってくれないか」みたいな話はくるものですから、やはりそういった形で今後も拡充していきたいと思えますし、あるいは京都の学校とやる場合には佛教大学さんにお声をかけて、大学間連携みたいなものができませんかという話も各教委からは伺っておりますので、そんな形でやっていけたらいいなというふうに思っております。

以上です。

○司会：ありがとうございました。大変今のお話の中に我々の耳の痛い話もありましたので、特に予算の執行の関係ですね。これは本当に各大学の皆さま方から同じようなご指摘を受けるものですから、少しずつは改善してきているところはあるのですが、やはり年度当初は特に学校と連携する時に年度の学校の計画というのは、前の学期、前の年度において決めているのは当然でございますから、そういったものと連携をしていかないと意味はないものになってくるので、ぜひもう少し我々のほうでも汗をかいて努力をしていきたいと思っています。

それと、それ以外の点については、GPの取組みの視点、もしくは活用の視点でいろいろご指摘をいただいたところがありますが、共通するものとしてやはり、お聞きしていると特に組織的なデマンドサイドとの連携のきっかけになっている。従来からほとんどの大学が地元の教育委員会辺りとは「連携協定」をおやりになっているケースのほうが多分多いと思うのですが、どうしてもそういうものの取組みが書面上、紙の上だけのつながりになっており、今一步お互いに腹を割ってつながりを持ち、また養成と採用というのをできるだけ接着させていこうという、そのような視点がなかなか難しかったのかなと。そういったものに対してこのGPを活用しながらお互いの距離感をもう少し縮めていって、お互いそれぞれニーズを把握して、それに対してそれぞれがお答えを出していくということに対してうまく活用していただいているのではないかということを思いました。

あと、山口大学のほうからありました保護者の意見を聞くということは、デマンドサイドを意識する時に

最もこれも大きな要素でありますから、多くの県の採用の実態などを見ると、PTAの代表者の方が面接官として採用の中に入っていたというのはいまも当たり前のような状況になりましたので、そういったことを考えても日頃から何も採用というテストの段階だけではなくて、もう少し前の段階からいろいろ保護者の意見も聞く機会を大学側が持つということは、非常に意味があるのかな、というふうに思っています。

次に、今のような取組みをいろいろご紹介いただきましたし、またGPを活用してというお話もご紹介をいろいろいただきました。それでもう一点、先生方にそれぞれお聞き申し上げたいのが、そういった取組みの中でやはり最初の話に少し戻るのですけれども、その理論と実践をどういうふうにもくつなげていくか。先ほどご発表の中にありましたように「融合」であるとか、両者をつなげていく、その両者を行き来する架け橋ですね、もしくは往還する、行き来する、こういったことがやはりデマンドサイド、もしくは大学の教育内容を考えていく時には非常にポイントになっていくと思います。そうした観点から、今後このGPというものをこういう事業であればいいというポイントがもしあればおっしゃっていただきたい。それとデマンドサイドとの連携といった点で何か今後もまたこういう取組みを考えたいということがあれば、その点も触れただけであれば大変ありがたいですし、最後に今回のこの取組みが、一部で触れていただきましたけれども、終わった後にどういう形でまた自分たち自身の取組みの中に吸収していくか。もしくは拡大発展させていくか。そのような視点、示唆というものがあれば、全て触れていただく必要はありませんが、それぞれいづれかに触れていただけて結構ですけれども、発表いただければと思います。

また申し訳ございませんが、山口大学の岡村先生から順番に報告いただければ大変ありがたいと思います。よろしく願いいたします。

○岡村：失礼いたします。理論と実践の融合ということに関しましては、我々は定型ができない資質能力を育てるということを一番の主眼にしていますので、学生が実践を行った後のフォローをどうするかと。その部分が一番の主眼になっています。そして理論的なものとしましては、我々大学教員が学生たちのアドバイスとかケアに当たっております。

それともう一点、これは県の教育委員会との連携に

よりますが、「ちゃぶ台」ルームのほうに現職の県の教員をされている方、この方を大学のスタッフとして客員教授の形で大学のほうに入ってきていただいております。これは先ほど申し上げた提携のおかげで実現できたことですが、それによりまして理論面、実践面、どちらともかなり密に我々は協働しながら学生のケアができていくということでございます。

それからプログラム終了後どうするかということですが、我々山口大学としましては、実はGPの以前からこういうことを考えて動き出していました。とにかく集まれる場、現実の場ですね、それを欲しいという気持ちがありましたので、それが一番大きな目的としてこのGPで実現できた。次はこれを使ってどうするかという部分になってきますので、さてこれをどう発展させていって次のGPにつなげるかということになってくるのですけれども、その意味では先ほど申し上げたようなデータの共有化などの部分ですが、従来のデータベースとは違うような、より力をつけられるようなデータの共有化ができるようなそういうシステムを、これから時間をかけて考えていきたいなというふうに思っております。ありがとうございました。

○司会：ありがとうございます。それでは佛教大学の達富先生、お願いできますでしょうか。

○達富：今後のことを考えていこうとするには、やはりこの2年間の評価というものをしっかりしなければならぬと感じております。大学側から考えてみれば先ほども報告させていただいたように、大きな成果と手応えを感じたということは言うまでもありませんが、やはり教育委員会、小学校などから、本プログラムがどのようなものであったのか、非常に気になるところでございます。今日、会場に京都市教育委員会の部長もお越しですから、今ここでマイクをお渡しして「どうでしたか」とお聞きするのが一番いいのかもしれません。

先日来、京都市の教育長に何度も本学に足をお運びいただいております。評価者として常に門川大作教育長からはいろいろと優しく、そして厳しい評価をいただいているわけです。また実際に取組んでいる小学校の校長先生等からも評価をいただいておりますが、とにかく大学が専門的な理論というものを、伝達講習という形ではなく直接職員室に持ってきてくれること、また子供と非常に近い年齢の若いエネルギーな実践力が直接学校に入ってくることで、こういったことが

本当にありがたいという、委員会からの評価をいただいております。

自負をするならば我々のプログラムにより、職員室が少しばかりでも活性化したのではないかなというようにも感じております。実際に私も小学校の教員をしておりましたが、とにかく学級担任というのは自分の目だけで子供を評価してしまいがちになります。しかし、大学の教員や、これから教職を目指す若い学生が自分のクラスを見てくれるというのは、覚悟も必要ですが、ありがたいものです。ある意味、学級における複数の目の評価ということになります。もちろん学生がどこまで評価できるかという問題はありますが、複数の客観的な評価だと思います。私たちはこの取組みをさらに発展的にしていきたいと考えています。

これから振り返ることも含めて、さらに発展的にしていくために、本学が考えていることのひとつは、本プログラムは、本当に煩雑な事務の調整の上で成り立っていることは言うまでもありません。ですから、専門的な専門職としての事務のシステムを確立し、その上で教員や学生がのびのびとしたいことを思い切りできるようなシステムを作っていくことが急務です。そのことで一つのところが過重負担にならず、長生きできいくシステムになると考えています。

○司会：ありがとうございました。最後に藤田先生のほうからお願いできますでしょうか。

○藤田：私のほうから3つお話し申し上げたいと思います。1つ目はGPの今後に向けて、大学と学校現場の関係の変化というのを目指していきたいと思っております。というのはやはり今まで大学は偉くて学校現場が教えを請うみたいな関係、あるいはいろんな学校に現職研修で話を聞きますと、特効薬はないのか、明日役に立つものを出せ、というようなことを言われることがあるのですが、大学が何か特効薬を持っていてそれを現場は応用する、これまでそういう関係だったのが、そうではなくて一緒に目の前の生徒の様子を探求して、そしてそれを変えていく手立てを探っていく。そういうパートナーとしての関係というものを作っていく必要があると思います。そのためにはじっくりと長くつきあっていく必要があると思います。

2番目として、今回行っているのが教育委員会での研修や教育センターでの研修ではなくて、大学で行っているということの意味を私たちはきちんと捉え直さなくてはならない、ということです。単に問題解決と

言っても何か問題がなくなったから「ああ、じゃあよかったね」という話ではなくて、その問題の背後にどのような理論があったのか、仕組みがあったのか。それを私たちはきちんと探求して、それを学問的な成果としていかなければいけない。そのようなところに私たち大学が果たすべき役割というのもあるだろうと思います。

3番目に文部科学省にお願いしたいのですが、今回のGPが終わったら「あとはそれぞれの大学で頑張っ

てね」という話ではなく、これを続けていくための支援はどうなのだろうか。何か今までやってきたものがすっぱりなくなってしまう。あとはいろんなものが削減する中で細々とやっていかなければいけないということではなくて、例えば同じような取組みでももう一度出して、こういった点がブラッシュアップしているのもう一回採択してくださいとか、そのようなことも可能なかどうか。その辺を少しお考えいただけると、私どもこれをさらにもう一回同じようなテーマですが、ブラッシュアップしたものを申請してやってみたいな道も考えられると思うので、その辺についてお考えをお聞かせいただければと思います。以上です。

○司会：ありがとうございます。それでは最後の点について、せっかく先生のほうからありましたのでご説明しますと、この事業自体先ほど申し上げたように去年スタートしました。今回初めて去年採択された大学においてどういう取組みをさせていただいて、その成功例、失敗例、どういうものがあるのかということはこのGPフォーラムという場を通じてご発表いただくということで事業自体まだ終わっておりませんが、1つの途中段階の検証、このようなものできないだろうかと、今日、こういう場を設けさせていただきました。当然まだ今日の段階でその検証というのはできないわけですが、今日お聞きした限り、先生方の取組みによって、仕掛けづくりに特に視点を置いてそういうものができつつあるのかな、という点を非常に強く感じました。

ただ、そうは言ってもそれを作るのに一定の財政的なバックグラウンドがあって、というところも当然あるので、その辺はぜひ検証をしっかり行って、先ほど先生方のほうからも評価をしっかりやっていくというお話もございましたが、評価をし、きちんとその部分の必要性、そしてまたそれが十分そういったものにお

応えてきているかどうか。そういったものを検証した上で、我々としてもできることならばこういったものを続けていきたいなということを思います。しかし、だからといって未来永劫同じやり方でいいのかと、それは適時適切に見直しをしていくということは当然必要なことだと思います。そのような点について、また先生方の取組みも含めて、各大学の先生方のご意見なども拝聴させていただいて考えさせていただきたいと思っています。そのようなことでこの場での回答とさせていただきますと思います。

それでは、平出先生から、これまでの各大学からの説明、もしくはそれぞれの学校の中でされてきたいろいろな仕掛けづくり、そのような発表をお聞きになったご感想でも結構ですし、また、今後のGP事業について、先生が選定委員長としてコミットしていただいたお立場で何か一言ご示唆をいただけるものがあれば大変ありがたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○平出：平成17、18年度と、二度にわたりましたこの教員養成推進プログラムを選定してきたわけですが、この申請書類を提出する折に教育委員会や学校からプロジェクトに関する意見書を添付してもらっています。その中で教育委員会はこのプログラムをどう評価しているかをどの申請書類も縷々説明してありますけれども、はたして教育委員会サイドから見てものくらしいメリットがあるものかということも大変気にしております。連携のあり方は既に平成13年8月に、文部科学省の調査研究報告書「教員養成等における大学と教育委員会の連携の促進に向けて一手を結ぼう、大学・学校・教育委員会」が出されております。8つの大学等から連携の内容について縷々説明して、いずれの大学もその必要性というのを指摘しているわけですが、このような内容が教育委員会サイドから出ないのかということを考えるわけです。全国教育委員会・教育委員長・教育長協議会というのがあるので、こういった協議会サイドから大学と連携したいという熱烈的な要請が出てくる必要があるのではないかと思っています。

さて、選定された大学についてですが、これだけの財政支援をしてもらい、特にあらためて教員養成を見直し、改善を図るきっかけにまで至ったか、成熟してきているかどうか伺いたいです。学部あるいは大学のごく少数の者が大変あわただしかったとか、GPの

取組に参加する学生は、教員免許を取得予定の学生の中でも少数の者しか関わっていないというところもあると伺っています。ともかくあらためて教員養成を見直す、あるいは改善を図るきっかけとなってきたのかどうか。また連携のメリットを現場サイドでしっかり把握、自覚してもらえているかどうか。学校に入り込むことでメリットは大学側だけであって学校現場にはあまりないのかもしれない。さらに今、課題である国民に信頼される学校づくりに自分たちのGPはいかに貢献しうるものとなりえるのか。そういう辺りもぜひお考えになっていただきたいと思います。

いずれにしろ皆さんが取組んだものが多くの関係者の共有財産となることをぜひ目指したいと思ひますし、このことによって我が国の教員養成全体が一層活性化されていくことが期待されるわけであります。私としてもこの事業の趣旨を徹底して、真に力量ある教員養成のためにこの事業による支援が有効に実施、活用させるよう引き続き促していきたいと考えています。

○司会：ありがとうございます。それでは、せっかくの機会ですから、会場のほうから何かこの際、今回のこのGPの取組みでも結構ですし、それ以外のことでも結構ですが、何かございましたら挙手をしていただいて、1人か2人くらいお聞きしたいと思ひますが、いかがでございましょうか。

○柳沢：失礼します。香川大学の柳沢と申します。今日は大変勉強になりました。ありがとうございます。

3大学に共通して1つ質問と、あと2番目の質問が上越教育大学にということをお願いしたいと思ひます。1番目の質問ですが、今回共通点がかなりあったかと思ひんですが、最初に理論と実践というお話もありましたが、もう1つ「コラボレーション」と言ひますが、あるいは「協働」、あるいは佛教大学さんでは「三位一体」という言葉がございました。いずれにしてもその場を作るという、仕掛けづくりという話がありましたが、場をつくるということではそれなりにもう既に意義があるだろうと思ひます。非常に工夫されて作られていてすごく参考になりました。もう既に昨年度からされていて、多分何となく感じられているところもあるのかもしれませんが、コラボレーションあるいは三位一体のその取組の質をどう大学教員が確保するのか。あるいはその質をどう高めることができるのかということが今後の課題にも入るのかもしれないのですが、あるいはまた定式化が難しいことなのかもしれないの

ですけれども、昨年度からされてきた中で我々がこう関わればコラボレーションの質、あるいは理論と実践の質がかなり確固である、あるいは高まるのではないかという辺りを何かお気づきになっている点、あるいは結論として成果として得られている点がありましたら、それぞれ出していただけたら参考になってありがたいと思ひます。

それから2番目、上越教育大学についてですが、香川大学も今、非常に似たコンセプトでGPをいただいております。その中でお聞きしたかったのは、現職の院生の方と学卒の院生の方、あるいは教員がということでも事例に出していただいたK中プロジェクト、「3・3・3」で9名ということでお話を伺ひましたけれども、その三者の関係というのはどんなふうになっているのか。いろんなパターンが各学校に入る中であったのかもしれないのですけれども、この辺り特に現職の方と学卒の方の関係とか、教員がどう関わったのか、お聞かせいただけたらと思ひます。

○司会：それでは、最初の点については山口大学のほうからお答えいただいて、2点目を上越教育大学のほうからお答えいただくということで少しまとめさせていただきますが、いかがでしょうか、お願いします。

○岡村：質の向上をいかに図るかということですが、我々大学教員はどちらかというと実践においては黒子に徹するようにしております。学生たちが自分たちで、あるいは学校と協働しながらその質の向上を図っていくというふうに誘導しています。というのは、どういう学生が参加していくのか、というのも、学生は自分たちで、この学生は非常に優秀だから一緒に連れて行きたい、学生たちが自分たちで引っ張っていく、あるいは学校で学生のオーディションをするということもあります。そして内容そのものについても学生と学校が相談しながら新しい行事をつくってみるということをしてもらひ、そのために予算的な部分であるとか、大学のサポートがほしい、という時に我々が出て行くという形で、学外に出た時には我々大学教員はあまり目立たないというような形であることで自然に質が保たれてきているような気がしています。

○司会：ありがとうございます。藤田先生から2点目について、ご回答お願いします。

○藤田：はい。本校の場合は今回、基本的に大学教員がチームを組んで、そのチームの中の学卒院生と現職

教員はその大学教員の指導生となっています。そのため、今回は現職教員と学卒院生を両方担当している先生が参加するという形に基本的になりました。今後はもう少しゆるやかにして、希望する院生を募集することも考えたいと思うのですが、最初は時間のこともありまして、大学教員とその指導生ということになりました。

もう1つ、質の向上という話ですと、やはり空中戦ではなくて具体的な子供の姿ですとか、あるいは具体的な実践というものを必ずベースに置いて話し合うという、そこがキーになったかというふうに思います。以上です。

○司会：ありがとうございました。それではあとお1人、どなたかご質問をお願いします。



○高橋：神戸大学の高橋と申します。今日お話を伺って、この『資質の高い教員養成』というプログラムではこれまでの考え方に加え、選定にあたっては実質これまで行ってきた実践及び継続性、それから平出先生のお話到最后出てまいりましたように、現場にどのぐらいフィードバックがあるということが非常に選定では重要な観点になっているというふうを感じるのですが、ある意味新規性を求めるというよりは、そちらのほうに選定の観点がシフトしているというふうに考えてよろしいのでしょうか。

○司会：そうですね。今のご指摘は全くそのとおりだと思います。新規性と言った時に、斬新さ、そういうものの見方、そういう視点というのもやはり他の大学では一切やっていない、非常に独自性のある特色ある取組みという点も当然一定の部分はあります。ただ、その一方で現実として先ほど平出先生のお話にもありましたように、選定委員会の中でのご意見を

我々も拝聴させていただいて、やはりいかに個々の取組を学校現場に還元していくか。また、その取組みとものを国民全体の財産として、もしくは教員養成系大学全体の財産として構築し、それをできるだけまた各大学がうまく使いこなせていけるように、いろいろ還元のシステムというのを考えていく。これも一つのポイントだと思います。

ただ、この点について私が僭越ながら申し上げましたが、平出先生のほうから少し今のご視点についてコメントをいただき、それで本日の分科会を終了させていただきたいと思います。よろしくお願いたします。○平出：新規性という基準を一つの柱にしていますが、多くの大学が既に行ってきたこと、あるいは行いつつあることよりも新しい何かが出てこないか、出てきたほしいということで、新規性や独自性という基準を立てたのです。「ちゃぶ台」が出た時には僕ら、驚きましたが、手続きの中の仕掛けとして出てきたという点では、新規性ではないのです。それをもって新規性の基準を引っ込め、実効性というか、デマンドサイドのほうの効果を優先させてきているのか、ということのお尋ねかと思うのですけれども、そう一方的でもないのです。ともかく連携協力、コラボレーションだと思っておりますので、両者に何らかのメリットというものになりません。例えば教育実習を依頼する時に、また学生を指導しなくちゃいけないのかとか、重荷であるということ述べる学校現場の先生方が現実いらっしゃる。それに新しい仕掛けとしてこのプロジェクトを持ち込みますと、さらに現場は大変だと。そういうことを正直に、思わず口に出してしまう教員がいることは事実です。そうであっても、教員養成はともかく養成と採用と研修という大きな流れの中で考えなければなりません。質の高い教員を求めるならば、この流れを考えなくちゃならない。したがってだからこのプロジェクトもただ養成段階にとどまることなく、現場サイドに本当に強力な、かつ質の高いよいインパクトを与えるようなものであってもらいたいです。○司会：ありがとうございました。それでは我々の主観でございますが、大変実りのある会議ができたのではないかと。本当にこれも会場の皆さま方、そしてまたパネラーの先生方のご協力によるものだと感謝申し上げます。

本日は選定委員長をしていただきました平出先生、それと山口大学の岡村先生、佛教大学の達富先生、上

越教育大学の藤田先生、ありがとうございました。今一度、大きな拍手をお願いできればと思います。

以上を持ちまして、本日の会議を終了させていただきます。ありがとうございました。

(了)